

2006年2月5日 降誕節第7主日礼拝

『もっと正確に』

(イザヤ52章7～10、使徒18章24～28)

パウロの第二回伝道旅行が終り、三回目の伝道旅行が始まろうというころ、初代教会に新しい人物が登場しました。アポロというユダヤ人です。エジプトのアレクサンドリアという町に生まれ、聖書に精通しており、大変雄弁な説教家でもありました。この人は、生まれ故郷にいたときから主の道を受け入れており、イエスのことを熱心に入びとに語っていました。このアポロが、パウロが去って間もないエフェソの町にやって来たのです。

アポロという名は、コリントの信徒への手紙一にも出てきます。「わたしはアポロに、わたしはケファにつく」という、あのアポロです。アポロの人となりを知るために、生まれ故郷アレクサンドリアのことにふれましょう。アレクサンドリアは長くエジプトの首都として栄え、ローマ帝国になってからはローマに次ぐ帝国第二の都市として発展しました。海沿いの町で大きな港が二つもあり、商業や貿易が盛んだったからです。科学や学問・芸術の都としても知られ、大きな図書館があったことでも有名です。この町には、何百年も前から大勢のユダヤ人たちが住んでおり、独自の文化を形作っていました。ギリシア語訳の旧約聖書である「七十人訳聖書」は、この町で編纂されたものです。

そういう町に生まれ育った人ですので、アポロは、ユダヤ人としての教育はもちろん、かなり高度な教育を受けていたと考えられます。さらにアレクサンドリアのユダヤ人の中には、エルサレムと行き来している人も大勢いました。ですので、この町にキリストの福音がもたらされていたとしても、不思議はありません。この町で「主の道を教えられたアポロは、霊に燃えて、イエス・キリストについて正確に語り教えていました(25節の直訳)。やがてエフェソに渡ると、そこでもユダヤ人を相手に会堂で大胆に教え始めました。神様は、キリストの福音がもっと前進するように、アポロのような人を選び、用いようとしたのです。

ところが、一つ問題がありました。アポロは何と、ヨハネの洗礼しか知らなかった、というのです。主イエスの先駆者・預言者ヨハネ、ヨルダン川で悔い改めのバプテスマを受けていたあのヨハネの洗礼しか知らなかった！ 同じようなことが、続く19章1節以下にも出てきます。「聖霊があるかどうか聞いたこともない」、「ヨハネの洗礼しか受けていない」という弟子たちにパウロが出会い、主イエスの名によって洗礼を受けた、という話がでてきます(使徒19章1～11)。そのため、アポロはバプテスマのヨハネの弟子だったと想像する学者もいます。バプテスマのヨハネが、イエス様のことを「来るべきメシア」と証したので、アポロはヨハネの弟子としてそう信じたのだと。そうすると、このときのアポロはまだクリスチャンでなかったことになります。実際このときのアポロが、その信仰がどこまで進んでいたのか、はっきり言い切れない面があります。しかし大切なのは、聖書が述べている事実です。アポロは、彼なりに主イエスの道を受け入れて、イエスのこ

とについて熱心に語り、大胆に教えていました。仮にこのときまだ求道者であったとしても、アポロが生まれ故郷をあとにして、見ず知らずの土地で、熱烈に主イエスの道を告げ知らせていたことは確かです。

アポロはユダヤの会堂に入り、大胆に主イエスのことを語っていました。すると、その話にじっと聞き入っていた者がいました。プリスキラとアキラというクリスチャンです。この夫妻が、かつてコリントでパウロを大いに助けていたのは、記憶に新しいところ（使徒18章）。二人はパウロを見送るためエフェソにやって来て、そのままこの町に留まっていたのです。そこに今度はアポロがやって来て、ユダヤ人を相手にイエスのことを大胆に語っている。見ず知らずの若者が、主イエスのことを一生懸命伝えている。そこに行くわたしのです。二人が聞いていると、アポロの教えは、「(旧約)聖書によく通じており、力があり、何よりも主イエスのことを正確に教えて」いました。けれども、「もっと正確に！」(26節)教える必要がある。それが二人の実感でした。そこでプリスキラとアキラは、アポロを教会に招いて、「もっと正確に神の道を説明」しました。26節は、原文のニュアンスを生かすと、こう読めます。霊に燃えて熱心に語っているアポロを、二人は「脇に引き寄せて」、「仲間として受け入れて」教えた。「もっと詳しく、正確に」解き明かした。二人の教えと導きを快く受け入れたアポロは、まもなくアカイア州に渡り、「恵みによって信じていた人々を大いに助け」ました。アポロが、「聖書に基づいて、メシアはイエスであると公然と立証し、激しい語調でユダヤ人たちを説き伏せたから」です(27~28節)。

お気づきでしょうか？ アポロの変化に！すでにアポロは「主の道を受け入れて」おり、「霊に燃え、霊に熱くなって」、イエスのことを最初から「正確に」教えていました。決して、間違った信仰を抱いていたわけではありません。でも、何かが足りなかった。パウロと共に教会を指導していた二人にすれば、「もっと正確さ」を求められる信仰でした。主イエスも弟子たちに、度々おっしゃっています。「あなたがた信仰の薄い者たちよ」。つまり「信仰がまだ小さい」と、主イエスは弟子たちによく言われたのです。「信仰があるにはあるが、まだ小さい。まだ十分ではない」。言い換えれば、「あなたの信仰はもっと伸びる。あなたの信仰はもっと大きくなれる」と、主は言われたのです。アポロが言われたことも、同じだと言ってよいでしょう。アポロが信じていたことも、人々に熱心に語り伝えていたことも、それ自体決して間違いではありません。むしろ「正確に」聖書から教えていました。でも「もっと正確に」語れる。もっと正確に教えられれば、あなたにもわかるはず。神の恵みのすばらしさが、もっと深くもっと詳しく、あなたにはわかるはず。それがわかったら、あなたは今よりもっと喜びに満たされるでしょう。そして喜びと確信をもって、もっと大胆に人々に救いを伝えられるはず。今までそれを教えてくれる人がいなかった。だから今、わたしたちがそれを教えてあげましょう。そう言ってプリスキラとアキラは、アポロを引き留め、教会に導いて、主イエスのことを「もっと詳しく、正確に」教えました。

このことをなされたのは、主なる神様です。神様がアポロを教会に導いて、もっと大切

なことを、詳しく正確に教えてくださいました。アポロも、二人の教えと導きを感謝して受けました。キリストの救いを、前よりもっと深く、受けとめ直すことができました。それが力となって、アポロの伝道はこのあと前進します。行く先々で「イエスこそメシアである」と公に宣べ伝え、恵みによって信じた大勢のクリスチャン、そして教会を大いに助けました。アポロに対して神様がなされたことは、今も教会の中で大切に受け継がれています。礼拝の説教とみ言葉による教えと導き、信仰問答の学びや教会学校でのお話。教会でなされる教えと導きが、いかに大切であるかを、この物語は教えています。

ことによると、アポロが「ヨハネの洗礼しか知らなかった」というのは、こういうことだったのかもしれませんが。アポロはヨハネやその弟子を通し、旧約聖書を通して知ったのでしょう。イエスこそ来るべきメシアだと。生まれ故郷のユダヤ人クリスチャンから、主の道を教えられて、素直に受け入れて信じてきたのでしょう。けれども、信じるには信じていたが、正直、確信に乏しかった。実感があまり伴わない信仰だったのかもしれませんが。というのもバプテスマのヨハネも、そうだったからです。ヨハネは最初イエス様のことを「わたしより優れた方」と呼び、「わたしはその履物をお脱がせする値打ちもない」、「その方は、霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」と証しました(マタイ3章11)。更に主イエスを、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(ヨハネ1章29,36)とまで呼びました。ところがこのヨハネは晩年、イエス様のことがわからなくなって、弟子たちを送ってこう尋ねています。「来るべき方(メシア)はあなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」。すると主イエスは答えて言われました。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き...死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまづかない人は幸いである」と(マタイ11章2~6)。

確かに信じてはいたのでしょう。アポロは、教えられた主の道を。イエス様のことを。けれども、本当のところまだ実感が乏しかった。教えられたことを素直に信じる信仰はあったけれども、本当にその通りだ、腹の底からわかったという実感はまだわいてこない。そういう状態だったのかもしれませんが。あるいはこのときアポロは、自分の罪は自分で悔い改めて、自分で償う。そういう理解の信仰だったのかもしれませんが。しかしそれでは、誰も救われない。自分で自分を救える人など、どこにもいないからです。そんなアポロに主は、まことの神の道を教えてくださいました。人は誰しも罪の中に生まれてくること。その罪を解決するために、救い主が降って来られたことを。わたしたちを罪から救うために、このわたしのために主イエスは十字架におかかりになられたのだ。尊い命をもって、わたしを罪から救ってくださったのだ。このことを実感できたとき、人ははじめてキリストを知るのです。そしてキリストを信じた者には、罪の赦しと永遠の命が与えられます。それも行ないによってではなく、神の恵みによって！ 最も大切なこの信仰を、はっきりと教えてくれたのが、エフェソ教会のあの二人だったのです。

より正確に神の道を教えられて、アポロは変えられました。今朝の聖書は、アポロの変

化を見事にとらえています。最初、雄弁で聖書に通じ、霊に燃えて、正確に教えていたアポロのことを、聖書はこう記しています。25 節：「イエスのことについて熱心に語り・・・」。確かにアポロは、熱心に、イエスのことを正確に語りました。でもイエスのことに「ついて」なのです。どこか遠いところにいる人のことを話している。話には聞いているが、実際には会ったことのない人のことを、一生懸命伝えようとしている感じです。ところがエフェソの教会に導かれて、教えと導きを受けたあと、彼は変わっています。アポロは、「聖書に基づいて、メシアはイエスである」と公然と立証した。イエス様こそわたしたちの救い主です。わたしはこの方に出会いました！　そうです、このお方こそ、わたしたちみんなを救うために、従順に十字架におかかりになったメシアです！　わたしたちの救い主です！　実感を込め、確信をもって、「イエスは主なり」と告白しているではありませんか！

わたしたちも、このアポロに続きましょう。主はわたしたちを、更に上へと召しておられます。今わたしたちが抱いている信仰、情熱、知識、理解に留まることなく、それらを越えたところにある、「もっとすぐれた道、神の道」を目指しましょう。主が召してくださる天を目指すのです。自分一人で、自分の力で信仰を高めようとしても、かつてのアポロのようになるだけです。しかし、あのアポロを教会に導き、主の道をもっと詳しく正確に教えてくださった神様がいます。アポロが教会の教えに心を開いて、それを受け入れたとき、アポロの伝道は大きく前進しました。霊に燃える信仰者は、いつも、み言葉の前に謙遜であり従順です。わたしたちは、主の召しにどこまでも忠実でありたい。主の教えと導きにいつも心を開いている者でありたいと願います。そのような者を通して、神はお働きになり、愛する人びとを助けられるのです。

[説教者：堀地正弘牧師]